山梨で農業36年、手話通訳22年

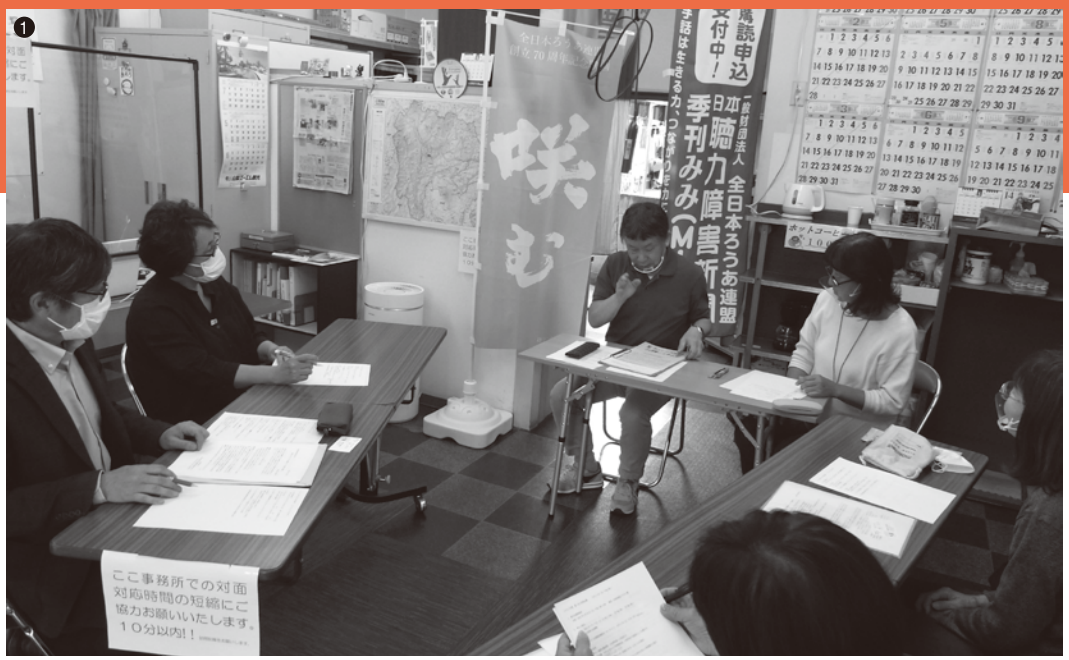
大崎 茂樹
北杜市

「晴れていれば、後ろに南アルプスが見えるのに残念だなぁ」あいにくの空模様に悔しそうな表情を見せたのは、トラクターで颯爽と現れた大崎茂樹さん。ここ山梨県北杜市明野町に25歳の時に移住し、農業を始めて36年になる。身体に良い食べ物を作りたいと、無農薬・有機栽培を志し、個別の顧客の注文に応え良質な作物を作り続けてきた。その一方で、1995（平成7）年から手話の勉強を始め、1998（平成10）年の山梨県手話通訳者試験に合格し、1999（平成11）年から手話通訳者としても新たな一歩を踏み出した。長年、二足の草鞋で駆け抜けてきたが、今年は農業の方を縮小させたいと考えている。山梨県手話言語条例の実現など、山梨手話通訳問題研究会の会長としての仕事により力を注ぎたいという。

※グラビアページでは、写真撮影の瞬間だけマスクを外していただきました。

▶写真❶
農薬や化学肥料を使わない農法に徹している。
▶写真❷
安心・安心な作物がお客様の信頼を得ている。

▶大崎さんの畑からは南アルプスや八ヶ岳が望める。



人権問題の活動から手話通訳の世界へ飛び込む

大崎さんは大学時代から人権問題に関心を持ち、北杜市明野に移住してからも地元の仲間と学習会を開いていた。その活動の一環で、パレスチナからろうの人を明野に招き講演会を行ったのだが、そこで手話で会話する人たちを見て衝撃を受け、手話を学ぼうと決意したという。５月16日、３団体（山梨県聴覚障害者協会、山梨県手話通訳士会、山梨手話通訳問題研究会）の定例会議が行われた。各団体からの近況報告、今年度の活動、共通の課題などについて最新情報を交換。三位一体の活動を支える重要な会議だ。

▶写真❶❷❸
3団体から6名が参加、今後も毎月末の月曜夜に定例会議を開催することを確認。

▶写真❹
山梨県手話通訳士会の利根川圓会長。大崎さんが手話通訳士となった当初からの付き合い。
「山梨ではゼロからのスタートで大変でした。大崎さんの人権団体での経験は、私たちの活動にも役立っています」

▶写真❺
山梨県聴覚障害者協会の事務所前で。3団体会議に参加された皆さん。

▶写真❶　パワフルな梨通研の理事の皆さん。

▶写真❷　理事会は蔵を改装したお洒落な会場で。

活発に意見が飛び交う理事会 甘さ控えめのケーキに絶賛の声!

5月16日午後４時からは、梨通研の理事会が開かれた。まず大崎会長から先ほど開催された3団体会議の内容報告があり、今年度の主な活動計画、コロナワクチン接種に関する県への要望の進捗状況、特に懸案となっている山梨県手話言語条例の制定等に関して、９割が女性の理事たちによる活発な論議が交わされた。「パワフルで情熱的な理事の皆さんたちにいつも支えてもらっています」という大崎さんから、感謝の気持ちを込めたサプライズプレゼントがあり、歓声が起きた。大崎さんお手製のチョコレートケーキは、「甘さ控えめで美味しい」と、理事の皆さんから大絶賛だった。

▶写真❸
大崎さんのケーキ。クリスマスを楽しみにするファンが多い。

▶写真❹
お店で売れる!美味しさに皆さんが拍手喝采。

高校の授業は社会の窓 私が大切にしている時間

多忙な日々の中で、大崎さんが大切にしている時間がある。高校生たちとの触れ合いもその一つ。県立北杜高校で15年、県立笛吹高校で4年、手話の授業を行ってきた。単に手話を教えるだけでなく、同じ社会に生活している聴覚障害者の存在や状況を知ってもらいたいと、時にはゲーム感覚を取り入れるなど工夫を凝らす。この授業は、今の高校生たちの考え方や社会に対する想いを知る窓でもあるという。お気に入りの場所は、かつての手話通訳仲間が始めたカフェ「くじらぐも」。ここで手話サークルも開いている。夢は、聞こえない子供たちに囲碁を教えること。誰もが対等に楽しめる囲碁に可能性を感じている。

写真／文　佐藤 篤

▶写真❶ 古民家を改装したカフェ「くじらぐも」
▶写真❷ 手話サークルの場も提供している「くじらぐも」
▶写真❸ 地域の囲碁クラブで。集中できる囲碁の楽しさを子供たちに教えるのが夢。